

天草版『平家物語』における 「副詞的修飾成分+コソ」と「コソー已然形」 —「コソー已然形」固定化の一側面—

徳 永 辰 通

1 はじめに

安田章(1990)は狂言の用例を検討し、「ようこそー已然形」「こそござれ」が「挨拶表現」から姿を消すところに「コソー已然形」の終焉を見ている。それではどのようにして「コソー已然形」が「挨拶表現」のみに残ったのだろうか。この問いは、「コソー已然形」が「挨拶表現」以外からどのようにして姿を消したのだろうか、と言い換えられよう。

「ようこそー已然形」は「副詞的修飾成分+コソー已然形」、「こそござれ」は「コソ+補助動詞已然形」と、形式が異なるため、「コソー已然形」が「ようこそー已然形」と「こそござれ」とに残る過程は別々に考察する必要がある。本論は「副詞的修飾成分+コソ」の「コソー已然形」が「ようこそー已然形」のみに残る過程を、天草版『平家物語』(以下、天草版)と原テキストの「副詞的修飾成分+コソ」の比較を通し、考察する⁽¹⁾。また、「コソー已然形」が「挨拶表現」という固定的な用いられ方をするようになる過程、つまり「コソー已然形」の固定化についても考えてみたい。

2 先行研究

「コソー已然形」が天草版に取り入れられた要因についてまとめているものに安田章(1980)がある。安田(1980)は原テキストから天草版に「コソー已然形」が取り入れられるかどうかにか①文体、②待遇表現、③位相が関わるとしている。それぞれをまとめると次のようになる。

- ①天草版において「コソー已然形」は、原テキストの地の文に相当する箇所から排除され会話文に相当する箇所に見られる。
- ②「身分的・年齢的に、従って心理的に下位の者に対して」の会話文である場合「コソー已然形」が崩れる。
- ③「道徳的、身分的に下位の者に適したことは違ひ」である場合にも「コソー已然形」が崩れる。

それでは、天草版の「副詞的修飾成分+コソ」が安田(1980)の指摘する限りではないことを確認しよう。というのも、安田(1980)の通りであるとすると、天草版における「副詞的修飾成分+コソ」を記述しても、その記述は安田(1980)の指摘の域

を出るものではないからである。そのため天草版のコソを扱う場合、この作業を怠ることはできない。

まず①についてであるが、天草版の「副詞的修飾成分+コソ」のうち、原テキストの地の文に相当する8例のコソが排除されている。そして会話文においても5例が排除されている。このことから、「副詞的修飾成分+コソ」形式においてコソの排除に①が関与していないといえる。また、「副詞的修飾成分+コソ」のもので「コソ—已然形」が崩れ、「コソ—非已然形」で文が終止するものはない。そのため②と③の関与もないといえる。「副詞的修飾成分+コソ」の天草版への採用、排除は安田(1980)の指摘とは無縁であることが確認できた。

3 天草版の「副詞的修飾成分+コソ」

3.1 考察対象

本論で扱う副詞的修飾成分は副詞のみとする。そのため、iの「ただ今のやうに」のような副詞句は考察対象からはずす。また、iiのような「副詞+コソ+補助動詞已然形」も考察の対象から除く(引用の下線は筆者による。一部表記を改めたところもある。以下同様。)

- i 滝口急ぎ出會ひ見奉れば、少しも違はせられず、ただ今のやうにこそおほえ
ますれと申して、… 天草版403-23
- ii 上人世にめでたうこそござつたれとあれば、… 天草版365-15

「指示副詞+コソ」も本論では扱わないこととする。天草版の「指示副詞+コソ」のものに「かうこそ」「さこそ」がある。天草版の「さこそ」の中には副詞化しているものが見られるため、「副詞的修飾成分+コソ」ではないと判断する。「かうこそ」も「さこそ」と同様「指示副詞+コソ」であり、本論では扱わない。

以上、本論で扱う副詞的修飾成分は副詞のみとし、「副詞+コソ+補助動詞已然形」「指示副詞+コソ」以外のものとする。

3.2 「副詞的修飾成分+コソ」の天草版への取り入れ方

原テキストと天草版の対応箇所における「副詞的修飾成分+コソ」の「コソ—已然形」の異同を見ると、次のパターンとなる(2)。

- ①対 訳：原テキストの「コソ—已然形」をそのまま踏襲する
- ②置換取入：天草版で新たに「コソ—已然形」を取り入れる
- ③変形取入：原テキストの「コソ—非已然形」を天草版において「コソ—已然形」として取り入れる
- ④削 除：原テキストからコソを削除する

⑤置換削除：原テキストの「副詞+コソ一已然形」を別の語句に置換する

安達隆一（1999）は、天草版と原テキストのコソの対応関係を大きく対訳、交替、挿入、削除の四種に分類している。本論は安達（1999）を参考に、さらに細分して五分類とした。①②③は天草版に取り入れられるものであり、④⑤は天草版から消されたものである。以下、天草版に取り入れられるものと天草版から消されたものとを区別し、それぞれのパターンについて考察していくこととする。

3.3 天草版『平家物語』の「副詞的修飾成分+コソ」

3.3.1 天草版『平家物語』に採用された「副詞的修飾成分+コソ」

以下、天草版に採用された「副詞的修飾成分+コソ」を見ていく（原テキストの対応箇所が高野本である場合は用例番号の右に「a」を付した。斯道本である場合は「b」を付した。）。

対訳（6例）

- 1 北条さござればこそ二十日と仰せられた日数も既に延びまするに、思へば賢うこそ今まで遁しまらしたれとて、共に喜びの色をなし、… 天草版392-14
- 1 b 北条サ候へハコソ・廿日ト宣フ・日数モ既ニ延候ニ・思へハ賢フコソ・今及遁シマイラセテ候へトテ・共ニ悦ノ色ヲ成シ・… 斯道本758-11

コソが接続する「賢う」と結び句の「今まで遁しまらしたれ」の関係を見てみる。「賢う」は「運良く」と現代語訳されるもので、結び句の「今まで遁しまらした」事態に対する、話し手「北条」の評価になっている。

- 2 …信俊はこれを受けて取って、またこそ参り奉らうずれと言うて、暇を申して出づれば、… 天草版63-15
- 2 a …、信俊これを給って、「又こそ参り候はめ」とて、いとま申て出でければ、… 高野本113-16
- 3 さて少将は今しばらくも念仏の功をも積みたうござれども、都に待つ人どもも、心もとなうござらうずるほどに、まづまかり上る：またこそ参らうずれと言うて、亡者に暇乞ひをして、泣く泣くそこを立たれた。 天草版79-16
- 3 a 「今しばらく念仏の功をも積むべう候へ共、都に待人共も、心もとなう候らん。又こそ参り候はめ」とて、亡者にいとま申しつゝ、泣々そこをぞ立れける。 高野本157-12

用例2、用例3は原テキストの「又こそ参り候はめ」がそれぞれ「またこそ参り奉らうずれ」「またこそ参らうずれ」というように、「コソ—已然形」がそのまま天草版に取り入れられている。コソの接続する「また」と「参り奉らうずれ」「参らうずれ」の関係を見てみる。「また」は、結び句の「参る」動作が再度起きたり、繰り返されたりする様を表すものであり、事態生起が再度であることを表していると捉えられる。

さて、注意しておきたいことは用例2も用例3も、どちらも「暇」を申し出る場面、つまり別れの場面ということである。「またこそ参り奉らうずれ」「またこそ参らうずれ」は別れの際の挨拶ではないのだろうか。そうすると、「また+コソ—已然形」は別れの際の挨拶、つまり慣用的なものということになる。

4 木曾さればこそと言うて、二万余騎を入れ替へて、関をどつと作つて喚いてか
 かったれば、平家しばしこそ支へたれ：志保坂の手をも追ひ落とされて、加賀
 の国の篠原へ引き退かれまらした。 天草版168-24

4 b 木曾・サレハコソトテ・二万騎入り替テ・時ヲ作り・ヲメイテカリ・平家・暫
コソ支ケレ・志保手モ追ヒ落サレテ・加賀國・篠原ヘコソ引退ケレ
 斯道本432-8

コソの接続する「しばし」と「支へたれ」の関係を見ると、「しばし」は「支へた」という動きの時間的あり方を限定しているものと捉えられる。ただ、この用例が天草版に取り入れられたのは「しばしこそ支へたれ」が逆接条件句だからであると考えられる。「しばしこそ支へたれ」には「：」が付されおり、一見そこで文が切れているかのように見える。しかし出雲朝子(1985)によると、「：」が付される前後の文は文章として一続きと意識されている場合と、会話文の前に「：」を付して会話文を導入する場合に用いられているという。そして出雲(1985)は「コソ—已然形」に「：」が付されているもので逆接条件句となっている例を挙げているが、その中に用例4が見えている。

5 …、家貞これを聞いてそのことぢや、私が相伝の主殿忠盛を今宵各々聞討ちに
 召されうとあることを伝へ聞いてござるほどに、そのなられうずる様を見届け
 うとて、かくてまかりあるほどに、えこそ出で申すまじけれとて、なほ揺り坐
 った： 天草版5-20

5 a …、家貞申けるは、「相伝の主備前守殿、今夜聞打にせられ給べき由承候あ
 ひだ、其ならむ様を見むとてかくて候。えこそ罷出まじけれ」とて、畏て候け
 れば、是等をよしなしとや思はれけん、其夜の聞討ちなかりけり。 高野本7-1

6 …、ややあつて清盛言はれたは：成親卿この一門を滅ぼいて、天下を乱らさう
 ずると企てられた。少将は既に成親の嫡子であれば、疎うもあれ、親しうもあ
 れ、えこそ申し宥むまじけれ：もしこの謀反逃げられたならば、御辺とても穩

- しうやあらうと申せと、言はれたれば：季貞帰り参って、… 天草版39-2
- 6 a や、あつて入道の給ひけるは、「新大納言成親、此一門を滅ぼして、天下をみだらむとする企てあり。この少将は、既彼大納言が嫡子也。疎うもあれ親しうもあれ、えこそ申宥むまじけれ。若此謀反とげましかば、御へんとでもおだしうやおはすべきと申せ」とこそその給ひけれ。 高野本91-4

用例5a、用例6aは「えこそ一已然形」で対訳されている。コソの接続する「え」は、文末の打消しの助動詞「まじ」と呼応し、「出で申す」「申し宥む」事態が不可能であることを表している。用例5、用例6の「えこそまじけれ」は、用例1から用例4までで見てきたものと違い、「えまじ」「こそ一已然形」という二重の呼応関係にあり、特殊な例と言えよう。

置換取入（1例）

- 7 …、牛の鞆、胸懸切り放し、さんざんにし散らいて、喜びの関を作つて、六波羅へ帰つたれば：ようこそしたれと、誉められた。 天草版17-9
- 7 a …、御牛の鞆・胸懸きりはなち、かく散々にしちらして、悦の時をつくり、六波羅へこそ参りけれ。入道、「神妙なり」とぞのたまひける。 高野本41-16

天草版の「ようこそしたれ」が原テキストの「神妙なり」と対応している。コソの接続する「よう」は、結び句「した」事態に対する話し手である清盛の評価である。

変形取入（1例）

- 8 …：とかくただ独りいつとなう明かし暮らすは慰む方もなけれども、通盛の上を見れば、賢うこそ幼い子どもを都に留め置いたれとあつて、泣く泣く喜ばれた。 天草版288-10
- 8 b …・トカク・唯独り・イツトナク・明シ暮スハ・慰方モ無レトモ・越前三位ノ上ヲミレハ・賢クソコ・稚キ者トモヲ・都ニ留メ並ケルソトテ・泣々悦玉ヒケリ 斯道本568-11

原テキストの「こそゾ」が「こそ一已然形」に変形されて取り入れられている。コソの接続する「賢う」と結び句の「幼い子どもを都に留め置いたれ」の関係は用例1と同様、「賢う」が結び句の事態に対する話し手「通盛の上」の評価となっている。

以上、天草版に採用された「副詞的修飾成分+コソ」を見てきた。用例2、用例3は暇を申し出る際の挨拶に用いられるもので、慣用的なものと考えられた。用例4は「こそ一已然形」で逆接条件句を構成するものであった。「こそ一已然形」は元々逆接条件句を構成する形式であり、用例4は定型的なものと言える。この慣用的、定型的

なものと、特殊な呼応関係にある用例5、用例6とを除くと、用例1、用例7、用例8の
 コソが接続する副詞は、結び句の事態に対する評価を表すものであるという特徴を抽
 出できる。

3.3.2 天草版『平家物語』に採用されなかった「副詞的修飾成分+コソ」
 天草版に採用されなかった「副詞的修飾成分+コソ」を見ていく。

削除 (12例)

- 9 …、結構な車に乗り、侍三四人連れて、常よりも引き繕うて出でられた。まこ
 とにそれが最後とは後に思ひ知られてござった。天草版24-6
- 9 a …、あざやかなる車に乗り、侍三四人召し具して、雑色・牛飼に至まで、常よ
 りもひきつくろはれたり。そも最後とは後にこそ思ひ知られけれ。高野本78-1

用例9の「後に」は「思い知られ」た事態の生起した時を位置づけるものである。
 事態生起の時を位置づける副詞に接続するコソは天草版で削除されている。

- 10 平家の侍ども道で馳せ向かうて、西八条へ召さるるぞ、きつと参れと、言うた
 れば：申し上ぐる子細があつて院の御所へ参る、やがて帰り参らうと、言うた
 れども、… 天草版25-9
- 10 a 平家の侍共、道にて馳むかひ、「西八条へ召さるゝぞ。きつと参れと言ひけれ
 ば、奏すべき事あつて法住寺殿へ参る。やがてこそ参らめ。」と言ひけれ共、
 … 高野本78-14

用例10の「やがて」は「帰り参」という事態が発生するまでの時間量を位置づけ
 ている。事態発生の時を位置づける副詞に接続するコソは天草版で削除されている。

- 11 勢はいかほどあるぞ？六千騎と聞いてござる：さらば好い敵ぞ、同じうは大勢
 の中でこそ討死せうずれとて、真っ先に進まれた。天草版244-15
- 11 b 勢ハ何程有ヤラン・六千余騎ト聞ヘテ候・サラハヨイ敵ゴザンナレ・同ハ・大
 勢ノ中ニテコソ・討死セメトテ、マツサキニコソ進マレケレ 斯道本495-5
- 12 義経馬ども主々が乗って、心得て落とさうずるには損ずまじい：義経はかう落
 とすぞとあつて、真っ先に落とされたれば、白旗三十流ればかり差し上げて三
 千騎ばかり続いて落とす： 天草版271-15
- 12 b 九郎義経馬トモ・主々が乗テ・心ヘテ・落ンスルニハ・損スマシキノ・義経ハ
 ・クバ落ストテ・マツ先ニコソ・落レケレ・白旗三十流ハカリ・差拳テ・三
 千騎ハカリ・ツツイテ落スハ 斯道本536-5

用例11の「真っ先に」は「進まれた」という動作に主体が関わった順番を表している。用例12も同様に、「真っ先に」は「落とされた」という動作に主体の「義経」が関わった順番を表している。動作に主体が関わる順番を表す副詞に接続するコソも天草版で削除されている。

- 13 もとより諍はぬ上に責めは厳しし、残りなう申したを白状四五枚に記いて、やがて奴が口を裂けと言うて口を裂かれ、首を刎ねられた。天草版27-6
- 13 a もとよりあらがひ申さぬうゑ、糺間はきびしかりけり、残りなうこそ申けれ。白状四五枚に記せられ、やがて、「しやつが口を裂け」とて、口をさかれ、五条西朱雀にしてきられにけり。高野本80-8

「残りなう」は「申した」対象の量を規定しているものと捉えられよう。対象の量を規定する副詞に接続するコソも天草版において削除されている。

- 14 ここには大納言殿こそござったものを、この妻戸をばかうこそ出でさせられたが、あの木をば自らこそ植ゑさせられたが、などと言うて、言の葉につけても父のことを恋しげに仰せられた。天草版80-11
- 14 a 「爰には大納言殿の、とこそおはせしか。此妻戸をば、かうこそ出入給しか。あの木をば、みづからこそ植給しか。」など言ひて、ことの葉につけて父の事を恋しげにこそ給ひけれ。高野本158-6

用例14の「恋しげに」は「仰せられた」という動作の行われた様子を表している。様態を表す副詞に接続するコソも天草版において削除されている。

- 15 …、栄花といひ、朝恩といひ、重職といひ方々極めさせられたれば、御運の尽きょうずることも難いことではない。富貴の家には禄位重畳せり：再び実なる木はその根傷むと見えてござれば、心細う存ずる。天草版48-13
- 15 b …栄花といひ、朝恩といひ重職といひ、旁きはめさせ給ひぬれば、御運の尽きんこともかたかるべきにあらず。「富貴の家には禄位重畳せり。ふた、び実なる木は、其根必ずいたむ」と見えて候。心ほそうこそおほえ候へ。高野本99-12
- 16 …：女院のお乳母の宰相と申す女房に頼盛相具せられたに、常に参らせたれば、日ごろは懐かしう思し召されたに、今このやうに申して参られたれば、あらぬ人のやうに疎ましう思し召した。天草版137-15・137-17
- 16 b …女院ノ御乳人・宰相ト申ス女房ニ・中納言相具シテ・常ハマイラレケレハ・日来ハ・懐コソ思召レシニ・今此申メマイリタレハ・アラヌ人ノヤウニ・疎コソ思召セ
斯道本290-5・290-6

- 17 しかれば則ち日本のほか鬼界、高麗、天竺、震旦までも御幸のお供をつかまつらうずると、口を揃へて申したれば、その時皆色をそつと直いて、頼もしう思はれてござる。 天草版194-24
- 17b 然レハ則・日本ノ外・鬼界高麗天竺震旦マテモ・行幸ノ御供仕ルゲキ由シ・異口同音ニ申ケレハ・人々・少シ色ヲ直シ・憑シクコソ思ハレケレ 斯道本471-3
- 18 北の方へもお文を遣はされうと思はれたれども、私の文は許されねば、言葉で軍は常のことなれども、去ぬる七日限りとも知らいで別れ奉ったこと心憂う存じたなどと言ひ含められた。 天草版292-22
- 18b 北方・大納言典侍殿ヘモ・御文奉ラハヤト思ハレケレトモ・私ノ文ハ許レネハ・詞ニテ・軍ハ常ノ事ナレトモ・去ヌル七日ヲ限リトモ知ラスメ・別レ奉リシ事・心憂クコソ覚候ヘ 斯道本574-4

原テキストでコソが接続している用例15「心ほそう」、用例16「懐」「疎」、用例17「憑シク」、用例18「心憂ク」は、それぞれ「おほえ」「思召レ」「思召」「思ハレ」「覚」という認識した内容である。原テキストにおいて認識した内容を表す副詞に接続するコソは、天草版においてすべて削除されている。

- 19a …、西光はもとよりすぐれた大剛の者ではあり、ちつとも色も変ぜず悪びれた身体もなう、居直りあざ笑うて申したは；さもさうず、清盛公こそ過分のことをば仰せられ、他人の前は知らず、西光が聞かうずる所では、さやうのことをばえ仰せられまい。院中に召し使はるる身なれば、… 天草版26-7
- 19b 西光もとよりすぐれたる大剛の者なりければ、ちつとも色も変ぜず、わろびれたる気いきもなし。みなをりあざわらって申けるは、「さもさうず。入道殿こそ過分の事をば、えこそ給ふまじけれ。院中に召しつかはる、身なれば、…」 高野本79-11

原テキストで「えこそ—已然形」であるものが、用例19ではコソが削除されている。

置換削除（1例）

原テキストの「えこそあるまじけれ」が、天草版で「おくまい」に置換され、コソが削除されている。

- 20 …、清盛は大きに怒って、たとひ関白なりとも清盛があたりをば憚られうずることぢやに幼い者に左右なう恥辱を与へられたことは遺恨の次第ぢや：このやうなことよりしてこそ人には欺かるぞ：このこと思ひ知らせ奉らいではおくまい：関白殿を是非とも恨み奉らうずると言はれたれば、… 天草版15-20

20 a …、入道大きにいかって、「たとひ殿下なりとも、浄海があたりをば、憚り給ふべきに、おさなきものに、左右なく恥辱を与へられけるこそ、遺恨の次第なれ。かゝる事よりして、人にはあざむかるゝぞ。此事思知らせてたてまつらでは、えこそあるまじけれ。殿下を恨奉らばや」との給へば、… 高野本40-9

用例19、用例20の「えこそ」は、対訳もされる一方でコソが削除されたり、置換削除されたりと、原テキストと天草版の対応の在り方で特殊な振る舞いを見せている。

天草版に取り入れられるコソの接続する副詞は、結び句の事態に対する評価を表すという特徴があったが、削除されるコソには評価を表す副詞に接続するものではなく、事態内成分を修飾するものばかりである。

3.4 天草版『平家物語』への「副詞的修飾成分+コソ」の採用・不採用の要因

3.4.1 句の種類の変更とコソの削除の関係

本節では天草版への「副詞的修飾成分+コソ」の採用・不採用の要因を考察するが、その前に句の種類の変更とコソの削除の関係について述べておきたい。

コソが削除される用例12であるが、この例は原テキストにおいて「マツ先ニコソ・落レケレ」とあり、これは条件句ではなく主句であると考えられる。それが、天草版において「真っ先に落とされたれば」と順接条件句に変更されている。また、用例13では、原テキストで「残なうこそ申けれ。」と主句であるのが天草版では「残りなう申したを白状四五枚に記いて」と準体句に変更されている。

「コソ一已然形」は主句となる場合と、逆接条件句となる場合がある。用例12は、原テキストの主句を天草版で順接条件句に変更するためにコソを削除したと考えることもできよう。そして用例13では、原テキストの主句を天草版において準体句に変更するためにコソを削除したとも考えられる。

句の種類の変更がコソの削除を促したかどうかについて、用例16が示唆を与えてくれる。用例16は原テキストでは「懐コソ思召レシニ」と逆接条件句内にコソが生起している。それが天草版においてコソが削除されるのであるが、「懐かしう思し召されたに」と逆接条件句のままとなっており、句は変更されないにも関わらずコソは削除されている。そうすると、句の種類の変更が原因でコソが削除されたとは考えられず、コソの削除には別の要因があると考えられる。

3.4.2 天草版『平家物語』への「副詞的修飾成分+コソ」の

採用・不採用の要因

前項では句の種類の変更がコソ削除の要因とは考えられないことを述べた。それではコソの採用・不採用には何が関与したのだろうか。

採用される「副詞的修飾成分+コソ」の、コソが接続する副詞は、一部の慣用的なもの、定型的なものを除き、結び句の事態に対する評価を表すものであった。一方、採用されない副詞は、原テキストと天草版とで特殊な対応関係にある「えこそ」を除

くと、すべて事態内において働くものであった。天草版への「副詞的修飾成分+コソ」の採用・不採用には、コソが接続する副詞的修飾成分の質が関わっていると考えられそうである。

仁田義雄(1993)は副詞を「言表事態修飾語」と「言表態度修飾語」とに二分し、前者を「言表事態の成り立ち方を様々な観点から修飾・限定したもの」、後者を「事態に対する話し手の評価的な態度や捉え方や伝え方を表したもの」としている⁽³⁾。天草版に採用されるコソが接続する副詞的修飾成分は、結び句の事態に対する評価を表しており、「言表態度修飾語」に相当する。一方、天草版で削除されるコソが接続する副詞的修飾成分は事態内において働くものであるため、「言表事態修飾語」に相当しよう。

天草版への「副詞的修飾成分+コソ」の採用・不採用には、「言表態度修飾語+コソ」は採用され、「言表事態修飾語+コソ」はコソが削除されるというように、コソの接続する副詞的修飾成分の質が大きく関与していると考えられる。

4 「コソー已然形」の固定化

4.1 「挨拶表現」への「コソー已然形」の残り方

安田(1990)は狂言の用例から「コソー已然形」の終焉を「挨拶表現」から姿を消すところに見ている。ちなみに、虎明本において「副詞的修飾成分+コソ」を探してみると34例見えるが、すべて「よう+こそ」であった⁽⁴⁾。

これまでの考察をまとめると、図1のようにまとめられる。「えこそーまじけれ」のような特殊な呼応関係にあるものを除くと、原テキストの「副詞的修飾成分+コソ」には「言表態度修飾語+コソー已然形」「言表事態修飾語+コソー已然形」とが見られる。「言表態度修飾語+コソー已然形」は「賢うこそー已然形」のみであるが、一方の「言表事態修飾語+コソー已然形」は広い言表事態修飾語に接続するかたちで見られる。

天草版の「副詞的修飾成分+コソ」は、一部の慣用的・定型的な表現をするものを除くと、「言表態度修飾語+コソ」であった。このことから、天草版成立時までに慣用的な表現をする場合を除き言表事態修飾語にコソが接続しなくなったことが窺える。用例8は原テキストで「コソー非已然形」であったが、天草版に「コソー已然形」として取り入れられている。このことから、天草版成立時までに、言表事態修飾語からコソが離れる(図1の①)一方で、「言表態度修飾語+コソ」と「コソー已然形」の結びつきが強くなった(図1の②)ことが窺える。

天草版の「言表態度修飾語+コソ」には「賢うこそー已然形」「ようこそー已然形」が見えたが、虎明本には「賢うこそ」が見えない。このことから、天草版成立後に「言表態度修飾語+コソ」の「賢うこそ」から「コソー已然形」がはずれ(図1の③)、「ようこそー已然形」のみに残るようになったと考えられる。「えこそー已然形」については、天草版において削除、置換削除されていたことを考えると、コソが「え」に

接続しなくなったり、「えこそ—已然形」が他の形式に取って代わられるようになったことで姿を消したと考えられる。

図1 「ようこそ—已然形」への「こそ—已然形」の残り方

原テキスト { 言表態度修飾語+こそ—已然形 … 賢うこそ—已然形
 言表事態修飾語+こそ—已然形 … 広い語に接続

- ①慣用的な表現をする場合を除き言表事態修飾語にコソが接続しなくなる
 ↓
 ②「言表態度修飾語+コソ」と「こそ—已然形」の結びつきが強くなる

天草版 { 言表態度修飾語+こそ—已然形 … {賢うこそ—已然形
 ようこそ—已然形} 「評価+事態」
 言表事態修飾語+こそ—已然形 … {またこそ—已然形
 しばしこそ—已然形} 慣用的・定型的

- ↓ ③言表態度修飾語+コソのうち、「賢うこそ—已然形」から「こそ—已然形」が離れる

虎明本 言表態度修飾語+こそ—已然形 … ようこそ—已然形

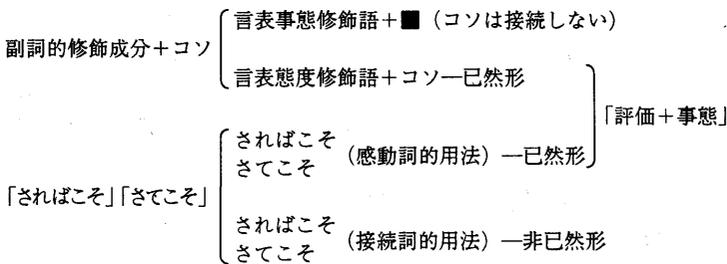
4.2 「こそ—已然形」の固定化の一側面

さて、天草版成立時における「こそ—已然形」の固定化について触れておきたい。天草版の「言表態度修飾語+コソ」はすべて「こそ—已然形」となっていた。そしてコソが接続する言表態度修飾語は結び句の事態に対する評価を表しており、「評価+事態」になっていた。このような「評価+事態」に「こそ—已然形」が関わる用例は、本論で挙げた用例のほかに天草版に2例見つかる。1例は「さればこそ—已然形」、もう1例は「さてこそ—已然形」である。

徳永辰通（2008）では天草版の「さればこそ—已然形」「さてこそ—已然形」は「さればこそ」「さてこそ」が予想通りであることに気づく表現をする感動詞的用法で、結び句の「—已然形」には予想通りであった事態が表されるものであることを明らかにした。この「さればこそ—已然形」「さてこそ—已然形」であるが、「さればこそ」「さてこそ」は「—已然形」の事態に対するある種の評価を表しており、「評価+事態」となっている。接続詞的用法の「さればこそ」と「さてこそ」の場合、「こそ—已然形」となる用例はない。

以上をまとめると、次の図2のようになる。

図2 天草版成立時における「副詞的修飾成分+コソ」と「さればこそ」「さてこそ」



天草版の「副詞的修飾成分+コソ」は「言表態度修飾語+コソ」に限られ、かつ「言表態度修飾語+コソー已然形」形式となっていた。そして、一部の慣用的な表現の場合を除いて言表事態修飾語にコソは接続しなかった。徳永(2008)では、感動詞的用法の「さればこそ」「さてこそ」の場合に限り「さればこそー已然形」「さてこそー已然形」となり、接続詞的用法の場合は「さればこそー非已然形」「さてこそー非已然形」となっていた。天草版に見える「言表事態修飾語+コソー已然形」「さればこそー已然形」「さてこそー已然形」は、いずれも「評価+事態」形式となっており、「コソー已然形」と「評価+事態」の結び付きの強さが窺える。

「コソー已然形」と「評価+事態」の結び付きの強さは、天草版成立時におけるものである。用例8は原テキストで「コソー非已然形」であり、天草版に「コソー已然形」として取り入れられている。また、天草版において感動詞的用法の「さればこそ」である「さればこそー已然形」は原テキストにおいて「さればこそー非已然形」である。このことから、「副詞的修飾成分+コソ」と「さればこそ」を見た限りではあるが、天草版成立時に「コソー已然形」と「評価+事態」の結び付きが強くなったことが見て取れる。図1の②で「『言表態度修飾語+コソ』と『コソー已然形』の結び付きが強くなる」としたが、これは「『コソー已然形』と『評価+事態』の結び付きが強くなる」と改めるべきかもしれない。

それはさておき、「コソー已然形」と「評価+事態」の結び付きが強くなったということは、「コソー已然形」の固定化を意味する。天草版における「コソー已然形」と「評価+事態」の結び付きの強さは、天草版成立時における「コソー已然形」の固定化の一例と位置づけられよう。

5 おわりに

本論で明らかにした点をまとめる。

「副詞的修飾成分+コソ」の「コソー已然形」が「ようこそー已然形」のみに残る過程を原テキストと天草版の比較を通して考察した。その過程は、まず天草版成立時までに言表事態修飾語にコソが接続しなくなり、かつ「言表態度修飾語+コソ」と

「コソ—已然形」の結びつきが強くなる。そして天草版成立後に「言表態度修飾語+コソ」の「賢うこそ」から「コソ—已然形」がはずれ、「ようこそ—已然形」のみに残るようになったと考えられる。

また、天草版の「副詞的修飾成分+コソ」と「さればこそ」を見た場合、「コソ—已然形」と「評価+事態」の結びつきが強いことを明らかにした。そして、この結びつきの強さは天草版成立時における「コソ—已然形」の固定化の一例と位置づけられることを述べた。

本論で扱わなかった「副詞句+コソ」と「指示副詞+コソ」が「コソ—已然形」との関係をどのように推移させていったのかについては今後の課題とする。

【注】

- (1) 近藤政美(1999)に倣い高野本巻第一～巻第三、斯道本巻第四～巻第七、巻第九～巻第十二を「原テキスト」とする。欠本である巻第八に国会図書館本を用いた研究もあるが、本論は用いない。
- (2) 本論で扱ったテキストは次の通りである。
天草版『平家物語』：近藤政美・池村奈代美・濱千代いづみ共編(1999)『天草版平家物語語彙用例総索引(1)』勉誠出版
高野本：新日本古典文学大系『平家物語』岩波書店
斯道本：斯道文庫編『百二十句本平家物語』汲古書院
- (3) 仁田義雄(2002)に従うと、「言表事態修飾語」は「命題内修飾成分」、「言表態度修飾語」は「モダリティ修飾成分」となる。
- (4) 池田廣司・北原保雄『大蔵虎明本狂言集の研究本文編上・中・下』(表現社)を用いた。

【参考文献】

- 安達隆一(1991)「係助詞『コソ』の構文史—近代日本語構文の成立に関連して—」
『神戸外大論叢』第42巻第2号
- 安達隆一(1999)「不干ハビアンと『天草版平家物語』—『コソ』の行方」『ことばと文学と書：春日正三先生古稀記念論文集』双文社出版
- 出雲朝子(1985)「天草版平家物語における句読点の用法」『青山学院女子短期大学紀要』第39輯
- 江口正弘(1994)『天草版平家物語の語彙と語法』笠間書院
- 近藤政美(1999)「天草版『平家物語』の翻字に関する諸問題」『天草版平家物語語彙用例総索引(1)』勉誠出版
- 徳永辰通(2008)「天草版『平家物語』の『さればこそ—已然形』と『さてこそ—已然形』—『コソ—已然形』採用の一要因—」『上越教育大学国語研究』第22号
- 仁田義雄(1983)「動詞に係る副詞的修飾成分の諸相」『日本語学』第2巻第10号(明治書院)

- 仁田義雄 (1993) 「現代語の文法・文法論」『日本語要説』ひつじ書房
仁田義雄 (2002) 『副詞的表現の諸相』くろしお出版
安田 章 (1980) 「コソの拘束力」『国語国文』第49巻第1号
安田 章 (1990) 「係結の終焉」『外国資料と中世国語』三省堂

(中部大学非常勤講師)